

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32816

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K11346

研究課題名（和文）青少年期のスポーツ経験による潜在的スポーツ観の違い

研究課題名（英文）Differences in implicit views of sports by adolescent sports experience

研究代表者

大橋 恵（Ohashi, Megumi）

東京未来大学・こども心理学部・教授

研究者番号：30454185

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、運動行動に影響するスポーツ・運動に対する潜在的態度が高い人の特徴（目的1）と、潜在的態度と日常的な運動行動との関係（目的2）を検討した。その結果、青少年期の部活動経験等は態度にほぼ影響していなかった。一方、スポーツ・運動に対する顕在的/潜在的態度が高い者ほど運動を実際に行っていることや、非意図的な日常的な身体活動が多いことがわかった。本研究では、顕在・潜在という測定法の違いだけではなく、態度の種類（二次元性）についても扱った。すなわち、認知的態度（役に立つ・有用）と情動的態度（楽しい・爽快である）である。その結果、楽しさという情動的態度の方が様々な変数との関連が深いことが見えてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は当初の目的を達したとは言えず、潜在的態度の形成因についてはさらなる研究が必要であろう。しかしながら、本研究には、潜在的態度研究に貢献できる部分もあると考える。IAT等で測定される潜在的な態度と自己報告法を用いて測定される顕在的な態度の差異や影響に関しては、ここ20年ほど様々なテーマで検討されている。この二者は一致しないことが多いものの、それぞれ行動をある程度予測することが示されている。潜在的態度の指標はさまざまな領域で取り上げられ始めたが、未だ不明点も多い。今後、健康行動への応用可能性が望まれる。

研究成果の概要（英文）：This project examined the characteristics of individuals with high implicit/explicit attitudes toward sports and exercise that influence exercise behavior (purpose 1) and the relationship between implicit/explicit attitudes and daily exercise behavior (purpose 2). The results showed that club activity experience in youth and other factors had almost no effect on attitudes, and those with higher implicit/explicit attitudes toward sports and exercise had more current exercise implementation and health behaviors. In addition, affective attitudes (enjoyable) were more strongly associated with behavior than cognitive attitudes (useful). Although we did not fully achieve our initial goal, our study contributes to implicit attitude research in some respects, particularly in showing that differences between implicit attitudes measured by the IAT and self-reported explicit attitudes can be useful in predicting behavior. Future application to health behavior should be considered.

研究分野：社会心理学

キーワード：潜在的態度 態度と行動 認知 情動 身体活動

1. 研究開始当初の背景

誰もが生涯の各時期にわたり各自の体力や年齢・目的に応じていつでもどこでもスポーツに親しむことを意味する「生涯スポーツ」が強調されるようになってきた。その実現に当たり、青少年時代に十分身体を動かした経験が成人後のスポーツへの参加につながるため、草の根スポーツの入口であるジュニアスポーツはプロを目指さない多くの一般の子どもたちにとっても大切な役割を持つ。日本では、幼児期から小学生にかけてスポーツの習い事が盛んで、中学生徒の運動部加入率も高いものの、中学または高校卒業と共にやめる者が大半である。日本のシステムでは学校の部活動を中心としてスポーツをすることが多いため、卒業と共にスポーツを行いにくくなるのが大きな原因ではあろう。しかしながら、ママさんバレーや大人のフットサルグループ、マラソン等何らかの形でスポーツに参加し続ける大人もいる。この違いはどこにあるのか。

成人の運動実施率や運動する理由・しない理由については多数の研究があり、時間や経済的ゆとり、一緒に行く仲間の存在、運動に価値を置く程度、社会的プレッシャー、環境的な容易さ等が実施率を高めることが判明している(橋本・斉藤, 2015; Weiss & Chaumeton, 1992 等)。しかし、このような環境的な要因が揃っていても「なんとなく」「めんどくさくて」しない層がいるように、より心理的な要因であるスポーツに対するイメージも影響がありそうだ。計画的行動理論(Ajzen, 1985)は個人的態度・主観的規範・行動の統制可能性の3点が行動意図を規定するとしているが、本研究で扱うものは個人的態度にあたる。スポーツ・運動に対する態度を一般的な自己報告法で測った場合、肯定的な態度を持つ人ほど体を動かす傾向が見られるが、あまり大きくはない(Hagger & Chatzisarantis, 2005; Van Stralen et al., 2009 等)。

この個人的態度に関し、近年潜在的な態度の影響が指摘され始めた。たとえば、Conroy et al. (2010)や Hyde et al. (2012)は、スポーツ・運動に対する潜在的な態度(反応時間を用いて概念同士の連関の強さを測定する方法: 潜在連合テスト(IAT; Greenwald et al., 1998)を採用)が、運動行動を予測することを示している。この二つの研究は、潜在的な態度が一日の歩数という運動量を予測することを示し、後者はさらに日常的な運動量の自己報告を予測することを示した。本邦においても藤田(2016)が、画像を用いた潜在的な態度測定手法(感情誤帰属手続き)を用いて、運動に対する潜在的な態度が運動行動を活性化することを示している。

このスポーツ・運動に対する潜在的な態度はいかに形成されるのだろうか。どのような要因がこのスポーツ・運動に対する潜在的な態度に影響するのかがあまり検討されていない。青少年時代のスポーツ指導においては、勝利至上主義を遠因とするハラスメントや気持ち主義等の指導の特徴が指摘される。このような青少年期のスポーツ体験が、態度形成にどのように影響し、さらには、成人後のスポーツ参加に影響するかどうかを検討することは意義があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、運動行動に影響するスポーツ・運動に対する潜在的な態度が高い人はどのような人かを横断的社会調査を用いて検討した(目的1)。スポーツ・運動に対する態度には、青少年時代の部活動中心とする経験が大きく影響するのではないかと考え、スポーツ経験・スポーツにおけるハラスメント経験・指導者の指導の仕方などの影響を分析した。

また、先行研究ではスポーツ・運動に対する潜在的な態度が影響するとして示された行動が一日の歩数・自転車こぎのペースなど限定的なものが多かった。態度と行動の乖離という古典的な問題について、スポーツ・運動に対する態度を材料に検討したいと考え、日常的な行動と態度との関係を検討した(目的2)。

本研究の一つの特徴として、顕在・潜在という測定法の違いだけではなく、態度の種類(二次元性)についても扱った点が挙げられる。顕在的な態度については、良いものかどうかを意味する認知的態度と、好き嫌いを意味する情動的な態度の存在が指摘されている。しかし、潜在的な態度は一次元としてとらえられることが多い。つまり、肯定的か否定的のみが問題とされてきた。

しかしながら、運動やスポーツに関して人が持つ肯定的考えとして、嫌いだ健康に良いとは思うなどのように、情動的態度と認知的態度が乖離することがあり得る。そのため、スポーツ・運動に対する潜在的な態度も、認知的態度(役に立つ・有用)と情動的態度(楽しい・爽快である)の、二種類に分けて検討することとした。

目的1のために研究1~5、目的2のために研究6を行った。

3. 研究の方法と成果

(研究1) 妥当性・信頼性の検討(2020年度実施、論文6研究1として発表)

まず、研究に用いる語を予備調査で選出した。つぎに、大学生25名を対象に、スポーツ・運動に対する潜在的な態度2種類(認知的、情動的)の関係と安定性を検討した。潜在的な態度の測定には従来のIATを用いた。これは、対象とするカテゴリーが肯定語と同じ位置にある試行(一致試行)と、否定語と同じ位置にある試行(不一致試行)との言葉の分類にかかる反応時間の差か

ら対象カテゴリーに対する潜在的態度を測定する手法である。IATの流れをTable1に示す。一致試行(Table1の3・4)と不一致試行(同6・7)の実施順は、先行研究同様ランダムに設定し、試行4と試行7における反応時間の差を潜在的態度得点とした。2種類のスポーツ・運動IATを順に実施し、約1月後に再測定した。

その結果、2回の潜在的態度得点の間には2種類共に中程度の正の相関が認められた。つまりある程度の再検査信頼性が認められたが、2種類のIAT得点間にも中程度の正の関係が認められ、スポーツ・運動に対して望ましいととらえることと楽しいと考えることがかなり近いことが示唆された。これは2種類のIATでは刺激語が異なったものの、カテゴリーラベルが同一でかつ連続して行ったために、方法的類似性を反映している可能性もある。研究2はそれぞれの潜在的態度に影響する要因を検討することで違いを明らかにすることを旨とした。

(研究2) 大学生での予備調査(2020年度、論文5として発表)

まず、刺激語を選択するためにスポーツ・運動に対するイメージ調査を行った。成人のスポーツ実施に関係すると考えられるスポーツのイメージに青少年期の課外スポーツ経験がどのように関連しているかを、スポーツとは関係がない進学をした大学新生を対象に検討した。具体的にはスポーツの良い所・悪い所を挙げさせる方法と(N=81)、スポーツから連想する言葉を挙げさせて望ましさを評価させる方法という(N=79)、2通りの方法で測定した。

その結果、大学生のスポーツに対するイメージは全体的に肯定的であり、内容としては、スポーツの直接的なメリットである身体的健康や精神的健康に加え、社会的な機能(密な人間関係の持つ肯定的な面)がかなり意識されていた。さらに、課外スポーツ経験者の方が健康以外の派生的なメリットを多く挙げていた。

つぎに、スポーツ・運動に対する認知的潜在態度と情動的潜在態度の違いをさらに検討するために、それぞれに関連する要因を検討した。具体的には、都内の大学生(N=323)にスポーツ・運動に関連するIATおよび質問への回答をオンライン上で依頼した。オンライン調査の形で、年齢・性別・専門分野を尋ねた後、言葉の分類課題と称してIAT課題を行い、スポーツ・運動に対する潜在的態度を測定した。その後、スポーツ・運動に対する顕在的態度や参加者のスポーツ・運動経験などを尋ねた。IAT課題の種類(認知的潜在態度を測る望ましさIAT、情動的潜在態度を測る楽しさIAT)は参加者間要因で操作した。

IAT得点の様々な尺度との相関を見た。その結果、IAT得点が高いほどプロスポーツへの接触行動およびスポーツへの好意が高いという弱い関係が認められた。IAT得点と理想の運動実施頻度には認知的潜在態度とのみ弱い正の関係が見られた一方、実際の運動実施頻度との正の相関は情動的潜在態度とのみ見られた。また、情動的潜在態度のみが、運動有能観・健康推進行動との正の相関関係を持っていた。高校時代のスポーツ経験との関連はほぼ見られず、課題関与型指導の経験と情動的潜在態度に弱い正の相関が見られたのみであった。

スポーツ・運動に関する行動については、4因子が得られた。そのうち、潜在的態度と有意な相関が見られた2因子について、潜在的態度および顕在的態度の影響を検討する重回帰分析を行った。その結果、顕在的態度の高さが接触行動と正の関係があった。また、認知的潜在態度が高いほど接触行動が高かった。

スポーツへ好意を持つ傾向にも顕在的態度が関係していた。情動的態度条件ではさらに、性別と潜在的態度との交互作用効果が見られ、潜在的態度が低い場合には男性の方が女性よりも好意が有意に高いが、潜在的態度が高い場合は性差が見られなかった。

以上をまとめると、認知的な潜在的態度と情動的な潜在的態度それぞれが結びつくスポーツ・運動関連行動が異なることが示された。具体的には、本人の運動有能感や運動ができるかどうかは努力次第だと考える程度、さらには努力やプロセ

Table 1

ブロック番号	課題の内容		試行数
1 練習	運動・スポーツ	日常動作	20
2 練習	快	不快	20
3 練習	運動・スポーツ	日常動作	20
	快	不快	
4 本番	運動・スポーツ	日常動作	40
	快	不快	
5 練習	日常動作	運動・スポーツ	20
6 練習	日常動作	運動・スポーツ	20
	快	不快	
7 本番	日常動作	運動・スポーツ	40
	快	不快	

潜在的態度に影響する要因を検討

Table2

実験で用いられた刺激語

(a) 研究1~3

態度の種類	肯定セッション		否定セッション	
	ラベル	刺激語	ラベル	刺激語
認知的	"快"	役に立つ	"不快"	ひどい
		素晴らしい		愚かな
		大切な		無能な
		有益な		役立たずの
		望ましい		だめな
情動的	"快"	楽しい	"不快"	悲しい
		うれしい		ひさんな
		明るい		つらい
		わくわくする		恐ろしい
		すてきな		苦しい
共通	"スポーツ・運動"	走る 体力 筋肉	サイクリング サッカー	
共通	"日常動作"	お茶する 読書 ソファ	ひじかけ椅子 スマホ	

(b) 研究5

種類	肯定セッション		否定セッション	
	ラベル	刺激語	ラベル	刺激語
認知的	"良い"	役に立つ	"悪い"	ひどい
		素晴らしい		有害な
		優れた		無能な
		有益な		役立たずの
		望ましい		だめな
情動的	"楽しい"	ゆかいな	"つらい"	悲しい
		うきうきする		きびしい
		幸せな		たいへんな
		わくわくする		恐ろしい
		おもしろい		苦しい
共通	"スポーツ・運動"	走る 体力 筋肉	ボール ダンス	
		サイクリング ハイキング		

スをはめる課題関与的な指導を受けてきた程度は情動的な潜在的態度とのみ相関が見られ、また、実際にスポーツや運動を行っている頻度も情動的な潜在的態度とのみ相関していた。一方、潜在認知的な態度は理想的な運動頻度および接触行動と正の相関が見られた。したがって、スポーツ・運動に対して楽しいという情動的態度が肯定的であることが、現在の運動習慣に対してポジティブに関連していると言える。

メディアや有名人の行うスポーツにたくさん触れることを示す接触行動には、潜在的態度と顕在的態度の両方が関連していた。これは、メディア上や有名人の行うスポーツに接触するという行動が、意識的なものと無意識的なもののどちらをも含むからであろう。

（研究3）社会人を対象とする調査（2021年度、論文4として発表）

若年社会人において、スポーツ・運動に対する潜在/顕在的態度と、過去の運動経験や現在のスポーツ・運動実施との関係を探的に検討した。20~39歳の社会人に対して、言葉の分類課題を用いてスポーツ・運動に対する潜在的態度を測定した後、顕在的態度や運動実施頻度等を尋ねた。潜在的態度の測定は、パーセプションR（クロスマーケティング社）を用いてIATを行った。予算の都合で、情動的態度のみを対象とした。

その結果、男性では潜在的態度が運動部経験者で非運動部経験者よりも肯定的であったが、女性ではこの二者に有意差は認められなかった。さらに、運動が得意な者ほど潜在的態度が肯定的であった。運動実施頻度を被説明変数とする分析では、現実の運動実施頻度に対しては、顕在的態度のみが有意であった。すなわち、スポーツ・運動に対して自己報告法で肯定的に回答した者ほど運動を実際に行っていた。一方理想の運動実施頻度については、顕在的態度と潜在的態度の交互作用効果が有意であった。単純傾斜検定によれば、顕在的態度が肯定的であるほど理想とする運動の頻度は高いという関係は潜在的態度の高さによらず有意だが、その傾斜が、潜在的態度が肯定的であるときにより明確であった。

大学生サンプル（研究2）では、認知的態度と情動的態度の二種類を扱った。その結果、情動的潜在態度は、プロスポーツとの接触・スポーツや運動への好意・運動実施度等と正の相関が見られていた。情動的態度のみを扱った本研究でも、相関のパターンは類似していた。しかしながら、運動実施頻度は顕在的態度とのみ正の相関が見られた。潜在的態度との関係が見られなかったのは、社会人になり自由に使える時間が少ないために、態度が行動に結び付きにくいからではないか。ただ潜在的態度は理想の運動実施頻度とも相関しておらず、顕在的態度のみ運動実施頻度と関係していた。そのためパーセプションRによる反応時間測定画面特有の問題があり得る。

（研究4）大学生対象本調査（2022年度、一部を論文6の研究2として発表）

研究1~3では、潜在的態度の測定に従来型のIATを用いた。従来型のIATでは対概念が不可欠である。「スポーツ・運動」の対概念として用いた「日常動作」には、スマートフォン使用や読書等インドア趣味の内容も含まれていた。そのため、日常動作に対する潜在的態度の影響が大きかった可能性も否めないと判断し、対概念を使わないシングルカテゴリーIAT（SC-IAT; Karpinski & Steinman, 2006）を用いて研究2を追試した。この際、スポーツ運動関連行動の項目も再検討した。

しかしこの研究を実施後に、認知的潜在態度・情動的潜在態度の測定で用いる刺激語に関しても予備調査が必要であること、2つの態度を分けるならばカテゴリーラベルも別にするべきであることという重要な指摘が、研究1・2投稿論文の査読過程で入った。そのため、研究4の結果は再検査信頼性部分のみを論文に入れるに留め、この2点を修正したうえでやり直した。

（研究5）大学生を対象とする本調査（2022~2023年度、予備調査を論文3として発表）

研究2の内容をより多くの大学生を対象に行ったものである。変更点は、予備調査で選んだ刺激語と、潜在的態度の測定法としてSC-IATを用いた点であった。

予備調査については、スポーツ・運動関連語については検討済みであったため、「快・不快」関連語について検討した。社会人68名と学生52名が回答した。肯定語17個について、「楽しい」との近さと「良い」との近さを6件法で尋ねた。つぎに、否定語17個について、「つらい」との近さと「悪い」との近さを同じく6件法で尋ねた。さらに、それぞれの語の肯定度を7件法で測定した。「楽しい」との近さと「良い」との近さあるいは「つらい」との近さと「悪い」との近さの間に有意な差があり、かつ使用するカテゴリーの方の平均値が4を越える語を優先してTable2bに示した刺激語を選んだ。「良い」のほうが「悪い」よりも、「楽しい」のほうが「つらい」よりも肯定度認知が有意に高いことも確認した。

本実験は、首都圏の大学生を対象にオンラインで実施した（N=170）。まずSC-IAT（望ましさor楽しさ）を行い、次に自己報告法を用いてスポーツ・運動の顕在的態度、運動経験（運動系部活動の経験、動機づけ雰囲気、指導者ハラスメント体験等）、運動実施状況等を尋ねた。

潜在的態度と他の変数との順位相関係数を算出した。その結果、潜在的態度とスポーツ・運動経験との関連として有意だったのは、中高時代のスポーツ活動を重要だったとした者ほど情動的潜在態度が低いこと、認知的潜在態度が高い者ほど運動を実際に行っていることのみだった。指導者の持つ動機づけ雰囲気や指導者ハラスメント体験等との関連は有意ではなかった。

一方、顕在的態度と運動経験・運動実施状況等との間には中程度から弱い関連が見られた。つまり、スポーツ・運動に対する顕在的態度の高い者ほど、課題関与的な指導を受けた程度が強く、

スポーツ活動を重要だったと考え、運動有能感が高く、プロスポーツとの接触が多く、日常的な健康関連行動を行っていて、運動実施頻度が高かった。

結果をまとめると、対カテゴリーとして「日常動作」を用いた場合と比べ、潜在的態度と運動関連行動や運動実施状況との関連は弱かった。そのため、研究2ではスポーツ・運動に対する態度だけではなく、インドア趣味を含む日常動作に対する態度の影響が大きかったのだと考えられる。潜在的な態度に影響する要因が少なく、これがどのように形成されるのかについてさらなる検討が必要であることが明らかになった。なお中高時代の運動部活動を重要だったと考える者ほど楽しさ SC-IAT が低い結果については、活動に過度に取り組むことによりスポーツ・運動の厳しさを感じたと解釈できるのではないかと考えられる。

(研究6) 態度と行動の関係の検討 (2022~2023年度、論文投稿中)

本研究では、今までの研究の中で疑問に思ってきた行動と態度との関係を扱った。すなわち、スポーツや運動の概念を用いて、目標接近につながる行動が態度によって促進されるかどうかを検討した。具体的には、スポーツや運動に対する顕在的・潜在的な態度と日常的な身体活動との関連を検討した。二重プロセスモデルに基づけば、潜在的な態度は意図的でない日常行動に関連し、顕在的な態度は意図的な行動に関連すると予測できる。これを3つの実験で検討した。

実験1 (N=174) では、シナリオ法を採用し、仮想的状況における段階の利用を従属変数、PC版 SC-IAT で測定した潜在的態度を予測変数として検討した。実験2 (N=53) では、従属変数を実際の行動(大学の授業参加時に段階を利用するかどうか)に変更した。実験3 (N=107) では、学内での段階利用行動と紙と鉛筆による SC-IAT で測定した潜在的態度との関連を検討した。

その結果、予測はほぼ完全に支持された (Table3)。シナリオを用いた実験1では、スポーツや運動に対する潜在的態度と日常的な身体活動との関連は示されなかったが、実際の段階利用を従属変数として検討した実験2と3では、潜在的態度と段階利用との間に正の関係が示された。一方、顕在的な態度は、すべての研究において自己報告法による運動頻度と正の相関を示し、意図的な行動との関連が示唆された。以上より、無意識的な行動における潜在的態度の役割を明らかにしただけではなく、態度と行動の関係を理解する上で方法論的要因と環境要因を考慮する重要性を示した。

Table 3
研究6-3の重回帰分析の結果()

説明変数	段階利用	スポーツ・運動実施頻度	
		現実	理想
条件(1=望ましさ, 2=楽しさ)	-.05	.02	.00
高校時代の運動部経験(1=有, 0=無)	-.01	.03	.00
性別(1=男性2=女性)	.32 **	-.04	-.16 *
IAT得点	.27 *	-.17	-.05
自己報告得点(楽しさ)	.06	.40 *	.36 *
自己報告得点(望ましさ)	-.19	.21	.31 *
高校時代の運動部経験*IAT得点	.12	-.19	-.02
条件*IAT得点	-.07	-.06	-.03
高校時代の運動部経験*自己報告得点(楽しさ)	-.29	.09	-.06
高校時代の運動部経験*自己報告得点(望ましさ)	.15	.21	.24 *
R^2	.17 *	.26 **	.39 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

(研究7) スポーツと運動の違い(社会人調査)(2023年度)

身体を動かすこと(身体活動)の重要性が指摘されるようになってきたが、日本語において身体活動は、スポーツと運動という二種類の用語で語られる。日本におけるスポーツは、運動とあまり区別されず使われる側面があるものの、活動の量や目的など異なる点もある。研究7では、運動とスポーツの違いについて行う動機から主に検討した。BREQ-3 (Wilson et al., 2006) を用いて、スポーツ・運動の動機付けを参加者間要因で測定・比較した。

2024年3月20~50代の成人800名対象にオンライン調査を実施した。主な質問項目は、この半年間のスポーツ・運動実施頻度、スポーツ又は運動に対する現在の動機付け、スポーツと運動の違いについての認識、スポーツ・運動に対する顕在的な態度、学生時代の運動部等経験であった。

現在分析した範囲では、結果は以下の通りである。運動とスポーツの違いに関して「あなたは運動とスポーツは別のものだと感じますか」と直接的に尋ねた(5件法)ところ、どちらとも言えないが40.5%と多く、当てはまらないが計27.3%、当てはまるが32.3%と意見が分かれた。また、具体的な違いとして、質の違い(スポーツの方が運動強度が強く、ルールがあり、競争の面が強い)と目的の違い(スポーツは楽しみのため、運動は健康のため)の2因子が得られた。

動機付けについて、下位尺度の信頼性は十分に高かったため、関連項目の平均値を下位尺度得点として分析に用いた。同一化と内的統制が3付近で高く、一番低いのは外的統制であった。それぞれについて、MANOVA(性別、条件、青年期の運動経験の有無の3要因;年齢、現在の運動頻度を共変量とする)を行った。その結果、まず、現在の運動頻度との関連は、外的統制を除き有意であった。年齢との関連は、投影的統制・外的統制において有意だった。同一化は、運動部経験者の方が高く、スポーツよりも運動で高かった。内的統制と統合的統制は、女性よりも男性が高く、運動部経験者の方が高いことが示された。投影的統制は、スポーツよりも運動で高かった。最後に、外的統制については、性別の主効果と条件と性別の交互作用効果が有意であり、男性ではスポーツよりも運動が高いが、女性では差が見られなかった。顕在的な態度については、スポーツの方が運動よりも楽しいと評価された一方、望ましさには差は見られなかった。加えて、両者とも運動経験と現在の運動頻度の効果が見られた。

以上より、スポーツと運動の違いとして、運動の方が同一化と投影的統制から行う度合いが高く、男性に関しては外的統制も運動でより強く働いていることが明らかになった。いくつもの点で差が見られたので、身体活動を推進したい場合、スポーツと運動は分けて考える必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 大橋 恵・澤海崇文・井梅由美子・藤後悦子	4. 巻 18
2. 論文標題 潜在連合テストの信頼性 スポーツ・運動に対する態度を用いた検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京未来大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ohashi Megumi M., Sawaumi Takafumi, Iume Yumiko, Togo Etsuko	4. 巻 3
2. 論文標題 Factors determining implicit attitudes toward sports and exercise: desirability and enjoyment	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Discover Psychology	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s44202-023-00073-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋 恵・澤海崇文・井梅由美子・藤後悦子	4. 巻 17
2. 論文標題 スポーツ・運動に対する態度と運動実施頻度との関係：若年成人での検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京未来大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 13～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24603/tfu.17.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋 恵、藤後 悦子、井梅 由美子	4. 巻 48
2. 論文標題 スポーツと運動の違い-一般的な認識についての調査-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 応用心理学研究	6. 最初と最後の頁 114～115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24651/oushinken.48.2_114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋 恵・ターン 有加里ジェシカ・藤後悦子・井梅由美子	4. 巻 93 (1)
2. 論文標題 地域スポーツでの母親のボランティア継続意図 ハラスメントと公正感受性の影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 10-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.93.20038	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大橋 恵・井梅由美子・藤後悦子	4. 巻 31
2. 論文標題 高校時代の運動部経験によるスポーツに対するイメージの違い：大学新入生を対象とする2つの調査より	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5997/sposun.31.1_65	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Megumi, M. Ohashi, Takafumi Sawaumi, Etsuko Togo, and Yumiko Iume
2. 発表標題 Relationship between physical activity and implicit and explicit attitudes toward sport and exercise.
3. 学会等名 15th meeting of Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大橋 恵・澤海崇文・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 スポーツ・運動に対する2種類の潜在的態度 (2): シングルカテゴリー-IATを用いた再検討
3. 学会等名 日本応用心理学会第89回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大橋 恵・澤海崇文・井梅由美子・藤後悦子
2. 発表標題 スポーツ・運動に対する態度と健康行動との関係2: PC版シングルカテゴリー-IATと階段利用行動
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大橋 恵・澤海崇文・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 スポーツ・運動に対する態度と健康行動との関係: 紙版シングルカテゴリー-IATと自己報告法を用いて
3. 学会等名 日本応用心理学会第88回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋 恵・澤海崇文・井梅由美子・藤後悦子
2. 発表標題 スポーツ・運動に対する2種類の潜在的態度 シングルカテゴリー-IATを用いた検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋 恵・澤海崇文・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 望ましさと楽しさの2種類に分割した潜在的スポーツ・運動観の測定: 潜在連合テストの妥当性検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大橋 恵・澤海崇文・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 潜在的スポーツ・運動観の規定因の探索的検討：簡易版潜在連合テストを用いて
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Megumi, M. Ohashi, Etsuko Togo, and Yumiko Iume
2. 発表標題 Sports-harassment experience by their coaches in high school and its effect on their college life.
3. 学会等名 32nd International Conference of Psycholog (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Megumi, M. Ohashi, Takafumi Sawaumi, Etsuko Togo, and Yumiko Iume
2. 発表標題 Implicit attitudes toward sports and exercise: Similarities and differences between Desirability IAT and Joy IAT
3. 学会等名 14th meeting of Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大橋 恵・井梅由美子・藤後悦子
2. 発表標題 高校時代の運動部経験によるスポーツに対するイメージの違い：大学新入生対象調査より
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	澤海 崇文 (Sawaumi Takafumi) (60763349)	流通経済大学・社会学部・准教授 (32102)	
研究分担者	藤後 悦子 (Togo Etsuko) (40460307)	東京未来大学・こども心理学部・教授 (32816)	
研究分担者	井梅 由美子 (Iume Yumiko) (30563762)	東京未来大学・こども心理学部・准教授 (32816)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------